

古訳経典における訳語について

鈴木裕美

訳経史のうえで古訳時代という、訳経僧の上限は安世高と支婁迦讖、下限は鳩摩羅什以前ということになる。本稿では、後漢時代の代表的な訳経僧である支婁迦讖と、西晋時代を代表する竺法護の各々の訳出経典から特徴的な訳語を捉え、検討を加えていきたいと思う。

先ず支婁迦讖の『道行般若経』について、これが支婁迦讖の訳であるということの根拠は『出三藏記集』巻第七(大5 471c)に、作者不明の「道行経後記第二」が現存する。これによると、光和二年(AD179年)に竺朔佛が口誦し、それを月支菩薩支婁迦讖が訳したとある。また同経の異訳経典は、玄奘訳『大般若波羅蜜多経』、施護訳『仏母出生三藏般若波羅蜜多経』、鳩摩羅什訳『小品般若波羅蜜多経』、訳者不明『摩訶般若鈔経』、支謙訳『大明度無極経』の五経がある。このうち『大明度無極経』が、『道行般若経』に最もよく対照しているということである。左記には『道行般若経』の特徴的な訳語をしめした。

- 1 用是為学多負勤苦。言泥犍禽獸薛荔甚大勤苦。語人言。当早断生死根。(大8 4481a)
- 2 檀波羅蜜。尸波羅蜜。羼提波羅蜜。惟逮波羅蜜。裨波羅蜜。般若波羅蜜。不增不减。若不波羅蜜者。(大8 4561c)
- 3 天中天。仏謂舍利弗。世多羅者。因般若波羅蜜住。其敬仏者。(大8 4401b)

1の泥犍は、*niraya* 地獄の音写語、薛荔は *preta*, *peta* 餓鬼の音写語である。一般的な訳語は『大明度無極経』にみるように、地獄餓鬼禽獸(畜生)である。

儻有来者説地獄餓鬼禽獸大勤苦。当早断之作応儀。(大8 491

1a) 大明度無極経

2は六波羅蜜のそれぞれについて、通常では忍辱というが屬提とし、*ksanti* を音写している。惟逮も同様に *virya*, *virya* 精進の音写語としている。

3の世多羅については、『摩訶般若鈔経』には天中天。佛謂舍利弗。世多羅者。因般若波羅蜜。(大8 5221a)と

有り、同文であったが、他の異訳經典には匹敵する箇所はなかった。世多羅についてさらに調べたところ、次に示すとおり西晋時代無羅叉の『放光般若經』にあることがわかった。

六波羅蜜者は世多羅。六波羅蜜者は道。（卷第十四 大8

971b）

当視其人如世多羅。汝於法師当修反復莫得背思。（卷第二十二 1411c）

『放光般若經』の別訳は、玄奘訳『大般若經』の第二分（通称二万五千頌般若）と、鳩摩羅什訳『大品般若經』（摩訶般若波羅蜜多經）である。これらの經の原典から世多羅の原語の見当がつくのであるが、前記に相当する箇所はなかった。

次に般若經經典群以外のいずれの經典に世多羅があるかを調べた結果、『須真天子經』にあることが判った。同經は、竺法護が二六六年に訳出したといわれる經典であり、これより竺法護の翻訳活動が始まったともいわれている。『出三藏記集』巻第七には、作者不明の「須真天子經記第五」（大55481c）が現存する。これによると、太子二年（AD266年）十一月八日に長安の白馬寺に於いて、竺法護が口授し、それを安文恵と帛元信の二人が伝言（通訳）し、それを聶承遠等が筆受したとある。なお異訳經典は現存しない。左記に同經の特徴的な訳語を示した。

1 菩薩云何行八惟務禪。答言菩薩於八惟務禪。本無無所造立禪。

略 如是迦葉而作此說。八惟務禪。（大15 1031b）

2 菩薩無所施為具檀波羅蜜。不持戒為具尸波羅蜜。有願悲為具驢波羅蜜。以懈怠為具惟速波羅蜜。（1061b）

3 常願道意而不放捨。得八惟務禪。是故菩薩得是八事。（1071b）

4 亦不多陀竭。亦不三耶三仏。亦不世多羅。如是天子。（1071a）

さて次に、支婁迦讖訳『道行般若經』と竺法護訳とする『須真天子經』の訳語が、訳者の特徴を示しているかということ、別の經典から検討してみたい。左記には支婁迦讖訳『阿闍世王經』とその異訳經典であるところの竺法護訳『文殊師利普超三昧經』の対照する箇所を示した。（A 阿闍世王經 B 文殊師利普超三昧經）

A 悉已從患得解。皆当知八惟務禪。爾時当有十二億菩薩。（大15 4041b）

B 一切慧解志八脱門。諸菩薩衆有十二億。（大15 4261b）

A 習六波羅蜜以四等心五句四事。（3911b）

B 六度無極。四等梵行。遊步五通。（4011a）

A 及聞仏所言其作逆惡当入大泥犁不。王言聞。文殊師利復謂。王汝自知当入大泥犁不。（4021b）

B 王自知当至地獄采。（4231c）

以上の資料をみるに、阿闍世王經の八惟務禪は、文殊師利

普超三昧経では八脱門とありまた、六波羅蜜を竺法護は六度無極としている。前述のように須真天子経では八惟務禪とあるものが、おなじ訳者であるにもかかわらず、文殊師利普超三昧経とは、訳語が同一でなく、ここに大きな疑問が残る。この疑問を説明するために竺法護が經典を訳出する際に使う訳語には、どんな特徴があり、須真天子経と文殊師利普超三昧経のいずれに近い訳語であるかということを他の經典でみることにする。

『正法華經』については、『出三藏記集』卷第八に「正法華後記第七」が現存する。これによると、太康七年（AD 286年）に竺法護が口訳したと記されている。また同經の異訳經典は、鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』、闍那崛多訳『添品妙法蓮華經』がある。左記に三經を対照させた。（1正法華經 2妙法蓮華經 3添品妙法蓮華經）

- 1 其声聞等皆逮聖行。行八脱門威曜方便。（大9 961a）
- 2 皆得具足六通三明及八解脫。（大9 281a）
- 3 皆得具足六通三明及八解脫。（大9 1261b）
- 1 此諸仏土。亦無地獄餓鬼畜生。（1031c）
- 2 無有地獄餓鬼畜生及阿修羅。（331a）
- 3 皆令清淨。無有地獄餓鬼畜生及阿修羅。（1031c）
- 1 奉行布施持戒忍辱精進一心五度無極。（1161b）
- 2 於八十萬億那由他劫。行五波羅蜜。（441c）

古訳經典における訳語について（鈴木）

3 於八十萬億那由他劫。行五波羅蜜。（1791a）
1 下至無可大地獄中。上至三十三天。（1191a）
2 下至阿鼻地獄。上至有頂。（471c）
以上資料にて示したとおり、八惟務禪については、文殊師利普超三昧経と同様に八脱門とある。また阿闍世王経の泥犂は、文殊師利普超三昧経および正法華經では地獄と訳される。そして須真天子経の六波羅蜜は、六度無極、正法華經では五度無極となっているのがわかる。

さらに竺法護の訳語の特徴のひとつに、通常「觀世音菩薩」と訳すところ、正法華經に於いて「光世音」と訳しているのである。

- 1 其名薄首菩薩。光世音菩薩。（大9 631a）
- 2 其名日文殊師利菩薩。觀世音菩薩。（大9 2a）
- 1 光世音普門品第二十三（1281c）
- 2 妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五（561c）
- 3 妙音菩薩品第二九三（1901a）

光世音菩薩については、さらに竺法護訳として六経録（出三藏記集、歷代三寶記、大唐内典録、古今訳経図紀、開元釈教録、貞元新定釈経目錄）に入録されている次の經典にも光世音が使われていることがわかった。（紙数の関係から引用は省略する）
持心梵天所問経（大15 171b）
離垢施女経（大12 891c）

大宝積経卷八密迹金剛力士会（大11 421c）

大宝警菩薩会（大11 6571b）

如幻三昧経（大12 1341a）

弥勒本願経（大12 1861c）

これらの資料から察するに、光世音なる訳語は竺法護訳出経典において一つの特徴的な訳語と考えてよいと思われる。

従って『正法華経』については、竺法護訳としての信憑性はたかいたと考えられる。他国の言語を自国の言葉に翻訳する際に、そこには必ず訳者自身の作った法則のようなものがあり、多くの訳経の中で一経のみ他の訳語を使うということは考えにくいのではなからうか。

つまり『須真天子経』の経後記の信憑性を重視するならば、例えば特殊な訳語である「惟務禅」は支婁迦讖と竺法護、両者の共通訳語となる。しかし、『須真天子経』の全体をみるとその訳語は、『正法華経』および『文殊師利普超三昧経』との訳語とは一致せず、むしろ支婁迦讖の『道行般若経』や『阿闍世王経』に近い訳語であるということがわかる。『出三藏記集』以下多くの経録、僧伝が現存し、中国佛教研究を志す者にとって豊富な資料を提供されていると言える。よって今後その資料的価値を見直し、できうるかぎりの資料を参照し翻訳者と訳経を明らかにしていきたいと考える次第である。

1 『大明度無極経』では、舍利弗を秋露子、須菩提を善業と訳している。また、羅漢辟支仏を応儀縁一覚と訳す。縁一覚は、竺法護訳出経典中に頻繁に見られる語である。同経は検討の要する経典である。

2 仏教史学 12巻12『竺法護』再構成の試み 岡部和雄先生によれば、常盤博士は『訳経総録』のなかで、『須真天子経』の経記についての真实性に疑義をもたれている。

〈キーワード〉 訳語、竺法護、支婁迦讖

（大正大学総合仏教研究所研究員）

新刊紹介

武邑尚邦 著

インド仏教学―体系と展相―

A5判・四〇四頁・定価二一、〇〇〇円

法蔵館・平成七年九月